

作品タイトル：黒めがちな K くん

著者名：神崎まゆ

あらすじ：小学4年生のとき、突然転校してきた「Kくん」に「わたし」は恋をする。でもKくんは1年後にまた転校していった。彼は宗教二世だった。わたしは結局Kくんの本当の姿がわからないままだった。

文字数： 4,803

本編：

Kくんは小学4年生になるタイミングの始業式に突然転校してきた。

「はじめましてKです」

気だるそうな挨拶は、新しい学年、新しいクラスに浮き足立っているクラスメイトたちを少し落ち着かせた。

わたしの学校は転校生が少なかったから尚更で、いつもうるさい子でも少し緊張してKくんの様子を伺っていた。

Kくんの黒目がちでまつ毛の長い目はどこを見つめているのかわからなかった。目を合わせてはいけないというルールがある都市伝説に出てくる幽霊を思い出して、少し怖くなった。でも背は小さめで線の細い身体だったから、背負っているランドセルは重たそうに見えた。

Kくんは番号がついたダボっとしている服を着ていた。元々そういうデザインなのか、小さいからダボっとしてしまうのか、転校初日にはわからなかった。

Kくんは先生に導かれて着席した。わたしも「Kさん」だったから、わたしの前の席に座った。スポーツ刈りで短く刈り上げられたKくんの頭を後ろからじっと見つめた。

「もっとかっこいい子がよかったなあ」

声には出さずに心の中でつぶやいた。スポーツ刈りでなんかオシャレじゃないし、背もち

っちゃくて声もちっちゃい。きっと運動もそんなにできないんだろうなと勝手に決めつけて、りぼんに出てくる転校生の男の子はみんなカッコいいのにとため息をついた。

ある日の国語の時間、ごんぎつねの朗読をしていると、Kくんの声が裏返った。

わたしは目の前のKくんを見上げた。見上げたのは音読するときは席を立たなければならなかったからで、下から見るKくんはいつもより大きく見えた。

Kくんの声は裏返ったわけじゃなかった。その後も高い声で音読をし続けて、クラスメイトは爆笑した。

先生に「真面目に読みなさい」と注意されると「一字一句間違えずに読みました」と言ってまた爆笑をかささらった。

その後の休み時間。Kくんのまわりには男子が集まってきた。今遊んでいるゲームやドッジボールのチーム分けについて話していた。先生に立ち向かえる男の子は、小学生のクラスでは悪い子かヒーローで、Kくんはヒーローだった。

Kくんは運動神経もよかった。足も速かったし、水泳もサッカーもドッジボールも得意でいつもチーム分けで取り合いになるほどだった。

その中でもバスケットが一番得意で、「宮城リョータに憧れている」と言っていた。どんな人が気になってブックオフでスラムダンクを立ち読みしてみたけど、不良の喧嘩が怖くて途中で読むのをやめた。

Kくんがバスケットボールを持つと、少しボールが大きく見えた。でもKくんはボールを操るのが上手で、よく身体の周りで器用にボールをまわしていた。「マジシャンみたい」と密かに思っていた。

Kくんはドリブルしながら忍者みたいに他の人をすいすい抜いて、あっという間にボールをゴール前に運んだ。綺麗な放物線を描いた球体はすっぽりとゴールにおさまった。

わたしはKくんを好きになっていた。

Kくんの服がダボっとしているのはバスケットが好きだからか。Kくんは運動はできるけど音楽が苦手で合唱するとき声が小さくなるんだな。KくんはSくんとよく話すな。ふたりと

も運動神経がいいし、Sくんはミニバスをやっているから話があうのか。KくんはOさんが好きなのかな。だってOさんから給食のカレーシチューをよそってもらったとき、ふたりは楽しそうに笑っていたから。

「Kさん」

Kくんに話しかけられた。わたしの名前を覚えていてくれたことがまず嬉しかった。

「なに」

「プリント回してだって」

「あ、うん。はい」

「ありがとう」

「ねえ。放課後みんなと一緒に公園で遊ばない？駄菓子屋に売ってるブタメン食べようよ。おいしいよ」

「放課後はだめなんだよね」

Kくんと学校以外の時間も共有したかった。特別な存在になりたかった。

ブタメンにお湯を入れているときもKくんのことを考えていた。放課後はなにをしているんだろう。

「ねえねえみんなクラスの男子で誰がかっこいいと思う？」

ある日クラスで一番可愛いと言われているMちゃんが言った。自分が一番可愛いから人のことも判断できるんだろうな。私はあんまり可愛くないから、そんな権利なんてないけど、言わないと仲間はずれにされちゃいそうだから言わなくちゃ。わたしは頭をフル回転させた。

「Sくん」

「やっぱそうだよねえ」とMちゃんは唇を尖らせた。

「Kくん」とは言えなかった。自分だけが知っている秘密基地の場所を教えるくらいもっ
たいたないなと思ったから。

ライバルがいないか気になって、そのとき給食でKくんと距離を縮めたOさんもいたから
みんなに聞いてみた。

「Kくんってモテるのかな」

「ま、わたしは興味ないけどね」って顔をちゃんとできていただろうか。バレていないか
ドキドキした。わたしの心配とは裏腹にみんな「うーん」という煮え切らない返答をし
た。

「運動神経はいいけど変わってるしね」

「背ちっちゃいしかっこいいとかはないかな」

「あんまり話したことないや」

「何考えてるかわかんないし」

みんなKくんについて話すことはもうないという空気を出し合い、引き続きSくんのどこ
がかっこいいかという議論を再開した。

よかったあ。ライバルいないんだ。

あっという間に冬になり、年末の風物詩となっている学芸会が近づいてきた。

今年は100万回生きた猫をやることになった。演劇にまるで興味がないわたしは、練習の
時間が時間割に組み込まれることで苦手な算数の授業がなくなるくらいしか楽しみが
なかった。

だから配役もなんでもよくて、セリフが一言しかない劇用に増枠された原作には出てこな
い料理人Aに立候補した。

黒板に書かれた役名とクラスメイトの名前の羅列を欠伸しながら眺めていたら、料理人B

の下にKくんの名前が刻まれた。

わたしは急いで学芸会用に変更されたいいつもとは違う時間割表を取り出して、いつから練習がはじまるか、頭の中でカレンダーをめくった。

「お前は人間のことちっともわかっていない。人間が単純そうに見えるのは社会で生きているからで、社会では単純そうに見えるやつほど複雑なんだ」

料理人は、餌を求めてやってきた主人公の猫に、偉そうに過ごすだけでは生きていけないと示唆する、劇作家のエゴがつまった役回りだった。

「お前は可愛い、素敵だと簡単に近寄ってくる人間のが嫌いなんだろう？俺の何がわかるんだって。でもその人間も思ってるぞ。お前は俺のことを何もわかっていない。これは嘘の優しさなんだよ。ってな」

Kくんはわたしの隣で淡々とセリフを読み上げた。いつもとは違うKくんの声色にドキドキして、顔が見れなかった。

Kくんは「何このセリフ。哲学的すぎるよ」と難しい言葉を使った。難しい言葉を知っているKくんもかっこいいと思った。

休憩の時間になり、トイレに行きたくなったから教室を出た。でも学年中の子が一斉に尿意を催していたため、教室から一番近いトイレは満室だった。

仕方なく学校の玄関に近いトイレにいやいや行った。このトイレは玄関から一番近いことで隙間風がかなり入ってきて、冬はとくに寒いのだ。

玄関を通過するとKくんが下駄箱の前にいた。話しかけようと思ったら隣のクラスのUさんもいて、思わず隠れた。

「わたしの悪い噂流すのやめてよ」

「そんなことしてないよ」

「わたしOくんのこといじめてなんかない。Oくんに噂を流せて言われたの？Oくんのお母さんに言われたの？」

「だから違うってば」

「だってKくんが来てからだもん。へんな噂流れたの。みんな私のことをおとなしいふりして人のこといじめてるサイコパスって言うんだよ。うちのお母さんもKくんのお母さんに変な噂流されたって言ってた。不倫してるとか、わたしに暴力ふるってるとか」

「うちのお母さんはそんなことしないよ」

Kくんは笑ってた。

面白いことがあると顔をくしゃくしゃにして、黒目がちな目が見えなくなるまで目を細くして静かに笑う子だった。その笑顔もわたしは好きだった。

でもそのときのKくんの目はぱっちり開いていて黒目がちでどこを見ているのかよくわからなかった。貼り付けられたみたいに口角だけが上がっていた。

大嫌いな冬が終わって大好きな春が来た。

小学5年生になるとKくんは転校してしまった。

「知ってる？Kくんってスパイだったらしいよ」

スパイ。言葉の意味をちゃんと辞書では引かなかったから、なんとなくの意味でしか知らない言葉。本当の意味を知るのが怖くて、結局輪郭だけ覚えた言葉。

そういえばサイコパスってどう言う意味だったんだろう。みんな覚えてたのカタカナをよく使う。カッコいいから使いたかっただけなんだろうな。

Kくんの親は、地元では有名な宗教団体に所属していた。Kくんは宗教二世だ。

Kくんと口論していたIさんの親もその宗教団体に所属していて、Oくんという子はその団体ではかなり偉い立場の家の子だった。IさんもOくんも、Kくんとともに転校してしまっただけだから、結局なにがあったかはわからない。

わたしの前には違うKくんが座った。運動神経はあまりよくないけど、学年で3番目くら

いに頭の良い、背の高い男の子。全国模試でもかなり上位に入っている秀才タイプ。同じKくんだけど、Kくんとは全然違うKくんになった。

違うKくんにプリントを回されて、わたしは乱暴に受け取った。ちょっとやけになっていた。そこに座ってほしい人がいきなりいなくなってしまったから。

新しいKくんはわたしの気持ちなんかこれっぽっちも気にしていないようで、さっさと前を向いて単語帳を見ていた。

Kくんのことはそのあと小学校6年生のときに1度だけ街で見かけた。

Kくんはお母さんに手をひかれて何事もなかったかのように歩いていた。

お母さんは色白で細くて黒髪が似合うきれいな人で、黒目がちでぼーとした視線がKくんそっくりだった。

ふたりは街一番の高級タワーマンションに入って行った。

わたしはふた리를追いかけた。その頃高学年になって江戸川乱歩をよく読んでいたし、コナンの映画も毎年観に行っていたから尾行には自信があった。

ふたりが乗ったエレベーターが19階で止まったことを確認すると、すぐさまわたしも乗り込み19階行きのボタンを押した。

階数を示す電子文字が19になるのを数えながら少し不安な気持ちになった。あんな噂があったお母さんだ。何をされるかわからない。

重力が通常運転となったことで我に帰ると、扉が開いた。KくんとKくんのお母さんがいた。

ふたりは十字架が中央に大きく印字された分厚い紫色の冊子を大事そうに持っていた。

「あっ」

思わず声が出て、お母さんはKくんに「お友達？」と聞いた。澄んだ冷たい声は小さいのに耳元で囁かれているくらいよく聞こえた。

「ううん。知らない」

Kくんは笑ってた。黒目がちな目で。

わたしはエレベーターを飛び出し、ひたすら走って逃げた。

エントランスを出て、マンションの隣にある公園に駆け込んだ瞬間に足の筋肉が痙攣し始めた。それで19階分駆け降りてきたことを実感した。

公園の鉄棒では小学3年生くらいの男の子とお母さんが逆上がりの練習をしていた。「あー、惜しかったね」と男の子に話しかけるお母さんが優しそうで、ほっとした。

何かあったらこの人たちに言おうと心に決めて、Kくんがマンションから出てくるのを待った。

Kくんとお母さんが出てきた。Kくんの手にはもう紫色の冊子はなかった。遠くて聞き取れなかったけど、何か言ってお母さんはKくんの頭を撫でていた。

褒められていたんだと思う。Kくんは目を細めて笑っていた。

わたしは思わず身を乗り出してしまった。またあの笑顔が見られたことが嬉しかったから。

Kくんと目が合った。

「お前は俺のことを何もわかっていない。これは嘘の優しさなんだよ」

隣でこのセリフを練習していたとき、Kくんはどんなことを思っていたんだろう。どんな顔をしていたんだろう。黒目がちなその目はどこを見ていたんだろう。